大学入学共通テスト試行調査 2018.11　地学基礎

全体概要

制限時間　２科目 60 分　**配点**　50 点　**大問数**　３大問	
出題分野	地学基礎全範囲
難易度　※対現行センター試験	標準
解答形式	マーク式
主な特徴　※対現行センター試験	第２問で「探究活動」に関連する問題が出題された。

全体出題傾向

◆基本的知識＋論理的考察

語句選択・正誤判定などの現行のセンター試験と同様の出題形式の問題も多数出題されている。また、出題分野についても今までと同様に全分野からとなっている。

その一方、現行のセンター試験と比べて、図表を利用した考察問題が明らかに増えており、思考力・文章読解力が要求されている。

対策

◆教科書ベースの学習＋実験考察

基本事項の学習については、今までの地学基礎の学習方法と変わらない。暗記するべき事項を暗記し、理解するべき事項を理解するだけである。

第２問のＢのように、「観測事実」と「考察で得られる事柄」という概念があるということを認識し、学校の授業（特に実験）を受けてほしい。独学の場合は問題演習で身につけていくことになるが、 あくまでも出題内容が地学基礎なだけであって、基本的な思考プロセスは教科を問わないことを意識しておこう。

大問別コメント

第１問

Ａ：地層から得られる情報についての基本問題である。現行のセンター試験と同様の問題である。

Ｂ：問２：岩石の形成年代・種類・特徴をまとめた図表の誤りを指摘する形式であり、目新しい設定である。しかしながら、基本的な知識で正誤判定が可能であるため、特別な対策は不要である。

問３：地球大気中の酸素濃度の変化についての問題で、単に事実を暗記しているだけだと解答が困難な問題である。実際に正答率は 12.1%であった。地史の分野はどうしても単純暗記になりがちであるが、地学現象の原因と結果をしっかりと理解しておきたい。

第２問

Ａ：地震および火砕流に関する基本問題である。現行のセンター試験と同様の問題である。

Ｂ：問２：探究活動に関する問題である。かなり目新しい設定であり、「地学」でも同様の出題がされている。どうしても、地学の実験（特に野外調査）は手薄となってしまい、単なる紙面上の学習になりがちである。「観察事実」と「考察で得られる事柄」という概念そのものがない高校生が多いのではないのだろうか？　この設問の最大のポイントは①・③が「～**した**こと」、②・④が「～**している**こと」となっている部分である。

Ｃ：問５：リード文が目新しいが現行のセンター試験と同様の問題である。中学生でも解答可能である。

第３問

Ａ：目新しい設定であるが、問われている内容は現行のセンター試験と同様であった。見慣れない設定であっても、リード文をしっかりと読み、既存の知識で判断できるということを意識しておきたい。

Ｂ：問３：有名な事実であるが、与えられた図から考察可能である。やや目新しい設定であるが、現行のセンター試験でも十分に出題される内容である。